

特集「キリスト教受容と伝統思想——武士道をめぐって——」

序

2009年9月に京都大学において開催された日本宗教学会・第68回学術大会では、本研究会に属するメンバーを中心としたパネル発表「キリスト教受容と伝統思想——武士道をめぐって——」を企画した。本特集は、そこでの各パネラーの口頭発表およびコメントを文章化したものである。

狭間 芳樹「キリシタンと武士道」

方 俊植「韓国の伝統思想とキリスト教」

岩野 祐介「内村鑑三の武士道」

東馬場郁生「*BUSHIDO* にみる比較の言説」

浅野 淳博 コメント

一昨年に告示された文部科学省の新学習指導要領にはじまる今後の中学校での武道の必修化にあたり、文科省はその意義として、「武道の伝統的な考え方を理解」することにより、「相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する」と説明している。¹このような趨勢は、モラルの低下が危惧される現代において、礼儀正しさをはじめとした道徳心の向上を希求する社会の要望に適うものとの認識が背景にあるように思われる。そうした状況のもと、メディアではたとえばスポーツの報道に際し、「サムライ（侍）」という言葉が多用され、また小説などの文芸作品でも武士道をテーマとしたものが近年随分と人気を博しているようである。

日本でこれまで何度か起こってきた武士道ブームであるが、そのたびに引き合いに出されるのが新渡戸稲造の『武士道（*BUSHIDO*）』である。実際、明治期のキリスト者たちによって案出されたキリスト教受容の土台（「旧約」）としての武士道という論調——日本のキリスト教受容にあたって武士道が一定の役割を担ったとの見方——は、新渡戸や内村鑑三、植村正久らによって指摘されて以来、今日およそコンセンサスが得られているように思われる。しかしながら、「武士道」という語が元来きわめて多義的に語られる上、その理解には一定の曲解が孕んでいること、さらにはそもそもそれが伝統思想と位置づけられるものであるのかといったところには大いに議論の余地がある。

東アジアにおいてキリスト教が受容され、新しい形態が生み出される際、受容者側において伝統思想というのは、はたしてどのように機能しているのだろうか。こうした関心に基づき、パネルでは、外来の新しい宗教思想と伝統思想との「媒介としての武士道」に

焦点をあて、パネラー各人の論点から「武士道」概念をあらためて検証し、厳密に捉え直すことにより、「キリスト教と武士道」という構図に対する従来の見方を越えうる視点の提示を試みた。

具体的な進め方としてはまず、同じく武士道との関連が指摘されてきた近世日本のキリスト教を取りあげ、キリシタンが殉教へと至った思想的背景を単に武士道精神に収斂させられないことについて狭間芳樹が考察し、その上で岩野祐介が、内村鑑三の解した武士道の内実を明らかにするとともに明治期のキリスト教と武士道についてのこれまでの捉え方を問い直した。また、ここでの「媒介」としての伝統思想という観点が日本だけではなく東アジアに通底するとの考えに基づき、方俊植は韓国の伝統思想とキリスト教との関係について考察をおこなった。そして議論をさらに敷衍すべく、東馬場郁生氏（天理大学国際文化学部教授）にはその理論的な分析——『武士道』における新渡戸の言説、すなわち複数の宗教を比較・検討するという比較法がキリスト教という新しい思想の理解に際してどのような効果を及ぼしたのかについて宗教比較論の視座からご発表いただいた。ただしこれらの発表は、主として受容者——キリスト教を受容する側からの考察である。そこで、被受容者——宣教する側の視点を網羅する目的から、聖書学の研究者であり、聖書の日本語訳事業にも関わっておられる浅野淳博氏（関西学院大学神学部准教授）にコメンテーターとしてパネルに加わっていただき、被受容者側のキリスト教のメッセージがどのように扱われているのかについて補完していただくとともに、各発表者、発表全体に対してコメントいただいた。こうしたなか当日の会場では、各発表及びコメントを受け、さまざまな関心から質疑応答がなされた。そこでの議論、指摘を受け、明らかになった点を今後の課題とし、各人はもちろんのこと、本研究会を通じてさらなる考察と解明を進めたい。

今回の特集では、研究会メンバー三名の発表を論文化して掲載するとともに、東馬場氏の発表及び浅野氏のコメントを併せて掲載させていただいた。両先生には、ご多忙中にも関わらず、快く原稿化をお引き受けくださったことを感謝いたします。

狭間 芳 樹

岩 野 祐 介

方 俊 植

1 引用中の傍点は狭間による。

文部科学省ホームページ：「中学校武道の必修化」（http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1221013.htm）、「中学校学習指導要領（2008年3月告示）」（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/hotai.htm）